



Charitable Trust

ニュースレター

2022年11月

目次

1. 議長挨拶
2. インタビュー：Marc Dalais(マーク・ダレ)氏
3. インタビュー：Jimmy Harmon(ジミー・ハモン)博士
4. 教育・啓発プロジェクトー最新情報
5. 主な取り組みと出来事





議長挨拶



議長挨拶



山下 悟郎

読者の皆様へ

2022年の季刊ニュースレターも第3号を数え、年内最終号となりました。MOLチャリタブルトラスト（以下、「基金」）の2021年の第一次募集では、社会的に恵まれない人々を支援し、モーリシャス南東地域の環境を保全しようと、地元NGOから過去に類を見ない高い関心が寄せられました。国内外のパートナーの協力もあり、NGOの皆様は素晴らしい仕事をしてくださいました。モーリシャスでの私たちのビジョン実現に、今までもこれからも、さまざまな形で力を貸してくださっているすべての方々へ、心から感謝申し上げます。

地元NGO支援プログラムの初年度は、非常に順調に幕を閉じました。期待以上の成果を挙げたプロジェクトもあれば、許認可の取得など諸事情により未だ進行中のプロジェクトもありますが、全体としては、すべてが計画通りに進みました。何より、パートナーの皆さんの間に助け合いの輪が生まれたことで、私たちの社会・環境両面の目標に沿って取り組みを促進できました。

2022年9月には、次年度の資金提供に向けた第二次募集を開始しました。募集は既に締め切り、選考の段階に移っています。地元NGOからは104件もの応募が集まるなど、前年に引き続き意欲的に取り組んでいただけていることを嬉しく思います。

ご存知のように、選考は透明性確保のため複数の段階からなり、12月も続く見込みです。いずれにしましても、参加されたNGOの皆様には、心より感謝申し上げます。今回も、非常に興味深く有望な企画が多数寄せられており、選考委員が嬉しい悲鳴をあげることは間違いありません。

また、「基金」は12月に運営委員会の年次総会を開催予定です。この機会に、地元NGOを支援するためにパートナーの皆様と取り組んできた素晴らしい成果や、「基金」設立以来のさまざまな活動の振り返りを計画しています。第二弾の募集に寄せられた新たなプロジェクトも発表し、最終選考を行います。

それでは、今号もお楽しみいただけますと幸いです。また来年、2023年のニュースレターでお会いしましょう。

MOLチャリタブルトラスト 議長

山下 悟郎

Click to navigate



議長挨拶 > インタビュー：マーク・ダレ氏 > インタビュー：ジミー・ハーモン博士 > 教育・啓発プロジェクト最新情報 > 主な取り組みと出来事





インタビュー：
Marc Dalais
(マーク・ダレ)氏
基金運営委員会メンバー



基金運営委員会メンバーMarc Dalais(マーク・ダレ)氏に聞く

1. 地元NGOとともに歩んだ1年目は、いかがでしたか？

全体としては、とても順調な1年でした。嬉しいことに、昨年選ばれたNGO26団体の大半が目標達成、あるいは達成に向かっていきます。一部のNGOは手続き上の問題を抱えていますが、それも数週間以内に解決されるでしょう。いずれにせよ、「基金」は、これらのNGOが定めた目標を達成するために、できる限り支援しています。

NGOの方々には皆熱心で刺激的な人たちばかりで、一緒に仕事をしていて本当に楽しいと感じます。個人的には、運営委員やI61財団などの支援組織の皆さんなど、「基金」もまた情熱的で献身的なチームだと思っています。

2. この1年で最も印象に残ったことは？

印象的なことがいくつかありました。まず、食料自給やマングローブの保護というテーマでワークショップを開催し、目的を同じくするNGOで顔を合わせたことが挙げられます。これらのワークショップは、関連するNGOにとって非常に有益な知見共有の場であり、彼らは目標達成に役立つ収穫を得ることができました。

また、マエブールでは数日間、プラスチックなどのゴミ拾いを実施し、環境保護に携わる複数のNGO団体が協働しました。各NGOが高邁な理想を掲げ、地域社会と手を携えて活動しているのを見ると、誇らしい気持ちになります。つまるところ、モーリシャスの公害対策には、ステークホルダー、当局、国民が力を合わせ、それぞれの取り組みの相乗効果を生むべきだと私は思っています。

“ステークホルダー、当局、国民が一丸となってモーリシャスの公害対策に取り組み、それぞれの取り組みの相乗効果を生むべきだと思っています”

その他注目すべき点としては、日本の著名な専門家の方々からもご協力いただいたことが挙げられます。特に、マングローブ研究の専門家である宮城教授は、マングローブ保全に取り組むNGOに多大なるご支援をくださいました。貴重な情報を共有していただき、一同感謝しています。マングローブの研究という共通の課題に向き合う日本の仲間たちの存在は、現地NGOにとっても非常に心強いことであると実感しました。



Click to navigate



議長挨拶 > インタビュー：マーク・ダレ氏 > インタビュー：ジミー・ハモン博士 > 教育・啓発プロジェクト最新情報 > 主な取り組みと出来事



3.2年目に向けて取り組むべき改善点がありますか？

改善すべき点は常にあります。これから数週間にわたり、運営委員会で改善点を議論していく予定です。特に、選ばれたNGOとの距離を縮める努力は、してもしすぎることはありません。彼らのニーズに合わせ、ますます現場に寄り添える方法を考えていきます。

4.2022～2023年、「基金」が支援するプロジェクトに望むことは何ですか？

まず、募集の結果、今回も100件以上の応募があったことを大変嬉しく思っています。まもなく評価の段階に移りますが、今後も南東地域のプロジェクトを優先的に支援していきたいと考えています。評価の結果次第ですが、2年目は、おそらく新規のNGOと、すでに支援していて継続あるいは新規のプロジェクトに取り組むNGOが、混在することになると思います。

2年目のプロジェクトについては、今回も基金の目的に沿って、「環境・生物多様性」「社会」「教育」「その他」の4つのカテゴリーを設定しました。



Click to navigate



議長挨拶 > [インタビュー：マーク・ダレ氏](#) > [インタビュー：ジミー・ハモン博士](#) > [教育・啓発プロジェクト最新情報](#) > [主な取り組みと出来事](#)





インタビュー：
Dr. Jimmy Harmon
(ジミー・ハモン)博士
基金運営委員会メンバー



基金運営委員Dr. Jimmy Harmon (ジミー・ハモン)博士に聞く

1.モーリシャスにおける「基金」のミッションとして、教育と啓発は主要な目的となっています。その理由を教えてください。

教育は能力開花になくてはならない柱であり、恵まれない立場の人々が貧困の連鎖から抜け出すための武器です。だからこそ、困難な境遇にある子どもたちの教育が、モーリシャスにおける「基金」のミッションの優先事項の一つになっています。この優先事項は、国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」に則って定めています。SDGsの「目標 4」が掲げているのは、誰もが質の高い教育を受けられる環境を整え、生涯学習の機会を促進すること。私たちは、健全かつこれまでにないような革新的な教育プロジェクトを支援することで、こうした目標の達成を全力でめざしています。

2.教育面では、今年最も進展した点は何でしょうか。

昨年「基金」が選定した26件のプロジェクトのうち、約10件が教育関連（就学支援やさまざまな活動への参加支援など）でした。具体的には、幼稚園や音楽学校、子どもサッカー klubなどの設立、持続可能な開発や環境保護に関する啓発活動、恵まれない子どもたちへの食事サポート、障がいのある若者のための有機栽培講座などができました。また、私たちが協働する複数のNGOの間で、教育をテーマにした集まりを開きました。これにより、NGO間のネットワークが生まれ、各種プロジェクトにおいてサポートし合えるようになりました。

3.教育・啓発プロジェクトは、受益者にどのような影響を与えたのでしょうか？

詳細はプロジェクトごとに異なりますが、全体として非常に良い影響があったと言えます。若い参加者は皆、非常に熱心でやる気に溢れており、どのプログラムでも一貫して積極的な参加が見られました。つまり、各プロジェクトでプラスの効果があったということで、それが非常に重要なのです。この若者たちは、より良いモーリシャスの未来のために積極的に関わることで、現状から抜け出し、さらに上を目指そうという意志を持っているのです。

4.教育分野に取り組んだ初年度から、次年度に引き継ぐべきことはありますか？

まず、教育プロジェクトに携わるすべてのNGOが素晴らしい仕事をしたこと、そして、これらのプロジェクトに関係するコミュニティから大きな反響があったこと。それから、私たちはこの分野で今後も取り組み、若者への投資を続けなければならないことも忘れてはいけません。若者こそが、モーリシャスの明日をつくるのですからね。



Click to navigate



議長挨拶 > インタビュー：マーク・ダレ氏 > **インタビュー：ジミー・ハモン博士** > 教育・啓発プロジェクト最新情報 > 主な取り組みと出来事



教育・啓発プロジェクトー最新情報



教育・啓発プロジェクトー最新情報



2021年に「基金」が選定したプロジェクトには、若者の教育・啓発に関する案件がありました。中には次の段階に進んだものや、無事に成功を収めたものもあります。今回は、その中から6件を、プロジェクト・コーディネーターのコメントとともにご紹介します。

La Chaux Mahébourg Football Club (ラ・ショーマエブル・フットボールクラブ)

10月15日(土)、La Chaux Mahébourg Football Clubチームに、「基金」からの支援によってサッカー用具(ユニフォーム、すね当て、ボール、ゴール、ハードルなど)が贈呈されました。シテ・ラ・ショー地区のソーシャルセンターで行われた贈呈式で、サッカー選手の卵である子どもたちは大喜びでした。このプロジェクトの目的は、恵まれない子どもたちが身体を動かす場を提供し、さらに社会生活における規律を身に付けてもらうことです。

「私たちは5人の有資格トレーナーで、シテ・ラ・ショー地区周辺に住む62人の子どもたちを受け入れています。昨年の頭に始まったこのトレーニングは、児童たちの参加意欲が非常に高く、嬉しく思っています。また、ありがたいことに、多くの親御さんたちが、子どもたちを応援するために参加してくださっています。なにより、スポー

ツに励むことで、子どもたちが怠け者になったり道を踏み外したりといったことを防げるのが嬉しいですね」

と、プロジェクト・マネージャーのPercy Keisler (パーシー・ケイズラー)氏は説明します。La Chaux Mahébourg Football Clubは、スポーツだけでなく、地域の子どもの指導や生活力のトレーニングも行っています。

Biodiversity Preservation (バイオダイバーシティ・プリザベーション)による、エコリテラシー・プロジェクト

もうひとつの教育プログラムは、「Biodiversity Preservation」のエコリテラシー・プロジェクトです。バンブー・ヴィリユとマエブルのLoreto Collegeの生徒たちに、持続可能な開発や自然保護といった考え方を紹介することを目的としています。プロジェクトは、カードゲームを使った子どもによる子どものためのエコリテラシー学習キットの開発、エコ・スラム・ワークショップ、そして学習キットのメイキング映像の制作、という3つの項目からなります。

「まず、生徒たちが選んだ12個のテーマに沿って、創造性とイノベーションについてのワークショップを行いました。生徒たちのスケジュールとの兼ね合いもあり苦労しましたが、カードゲームの絵柄はそろそろ完成しそうです。全体として、生徒たちはこのプロジェクトに非常に関心が高く、ま

た、環境問題に対して非常にクリエイティブで柔軟でした。この点では、私たちは「基金」のサポートのおかげで、すでに目標を達成できているといえます」と、「Biodiversity Preservation」のHoozla Ramoly Sookia (フーズラ・ラモリー・スーキア)氏は語っています。

The Loreto College of Mahébourg (ロレットカレッジオブ・マエブル)

貧しい家庭の子どもたちを多く受け入れている、マエブルのLoreto Collegeは、新たな支援プログラムを開始しました。このプロジェクトには、経済的に余裕のない家庭の子どもたちに向けた毎日の昼食の無償提供や、学習格差を緩和するための支援プログラムなどが含まれます。13歳から18歳の計85人の子どもたちが、年間を通じてこのプロジェクトの恩恵を受けていました。

「このプロジェクトはご家庭や子どもたちから非常に好評です。ここ数年、各家庭が経験してきたさまざまな困難を思うと、とても嬉しい支援だったのではないのでしょうか。「基金」のサポートのおかげで、これまで一部の生徒は縁がなかった修学旅行の資金も確保できるようになりました。これまでにオデュッセオの水族館を訪れたほか、年末にはカゼラへの旅行を計画しています。第二次募集では、『みんなのスポーツ』『救急救命講習』『無料医療相談』などの企画を追加しました」と、プロジェクト・コーディネーターのJeff Quirin (ジェフ・クイリン)氏は説明します。

Click to navigate



Youth with Disabilities Empowerment Platform (ヤング・ウィズ・ディスアビリティズ・エンパワーメントプラットフォーム) (YWDEP)

YWDEPのプロジェクトでは、障がいのある若者たちが菜園を作れるように、有機栽培の基本を教えています。同NGOの本部内にあるの農園は、受益者とその家族に有機野菜や果物の収穫をもたらしただけでなく、多くの若者とその家族が、習ったことを各家庭の菜園で実践するきっかけをつくりました。

「私たちは、学校に行けなくなった障がいのある若者を受け入れています。彼らは皆、一生懸命に菜園の手入れをしてくれています。始めた当初はちょうど大雨の時季だったため、畑が荒れてしまうなど苦労もありました。しかし、「基金」が支援するいくつかのNGO団体と共に有機栽培に関するワークショップに参加し、そのうち一部の団体と交流を続け、大いに助けていただきました。例えば、「Falcon」からガーデニングのトレーニングを受けたり、「Precious Plastic」と合同プロジェクトで協働したりしました。通常、地元の団体同士はほとんど交流がないのですが、「基金」のおかげで私たちはつながり、お互いにサポートし合えるようになりました」と、プロジェクト・マネージャーのFerozia Hosanee (フェロツィア・ホサニア) 氏は語ります。

Bonheur Associé aux Enfants (ボヌール・アソサイ・オークス・エンファンツ)

NGO団体「Bonheur Associé aux Enfants (子どもと関わる幸せ)」の「Enfants

Heureux (ハッピーチルドレン)」プロジェクトでは、南東地域のさまざまな学校に通う恵まれない子どもたち65人に毎日昼食を提供しています。また、食料支援だけでなく、学習支援も行っており、放課後に宿題をする場所を提供しています。

「私たちのチームは、子どもたちの食事の準備のため、朝5時から活動を開始します。『毎日同じものを食べている』なんてことがないように、できるだけメニューに変化を持たせています。受益者は幼稚園児や小学校の児童です。これまでは家庭の状況に応じて区別されてきた子たちですが、彼らは皆同じ子どもです」と、同団体代表のCindy Constance Zamire (シンディ・コンスタンス・ザミレ) さんは話します。

Ti Rayons Soleil (ティ・レイオンズ・ソレイル)

NGO団体「Ti Rayons Soleil」は、マエブールのラ・ヴィル・ノワール地区に保育園「Les Ti Serins」を開園しました。シテ・ラ・ショー周辺地域の子どもたちが無料で通い、モンテッソーリ・メソッドに基づいた革新的な学校プログラムを受けることができます。学校の建設は完了し、同団体は子どもたちが学校に通うために必要な認可を文部科学省から取得しました。

「『基金』の取り組みの意義は、そのネットワークにあると思います。一人の力だけでは、プロジェクトは立ち上げられません。この地域に真のインパクトを残すためには、皆で協力し合うことが不可欠なのです。特に、「Bonheur Associé aux Enfants」「Mahebourg Espoir」「Precious Plastic」「Action Familiale」といった団体とは、ぜひ一緒に仕事をしたいと思って

ています。私たちそれぞれのプロジェクトが補い合えば、きっと何か付加価値が生まれるはずですよ」と、「Ti Rayons Soleil」のBérengère Séries (ベレンジェール・セリエス) さんは述べています。

社会全体のために各団体が力を合わせる

2022年6月3日(金)、レ・ボー・ド・プロヴァンスにある「Bonheur Associé aux Enfants」の本部で、「基金」プログラムに参加している教育分野のNGOがワークショップを開催しました。その目的は、各NGOがプロジェクトについて発表し合い、近い目的を持つ組織と知り合うこと。当日は商船三井のモーリシャス環境・社会貢献チームのメンバー2名も同席し、地元NGOの活動やモーリシャスの現状、「基金」が資金提供しているプロジェクトの進捗などを確認しました。

参加したNGO団体は、「Bonheur Associé aux Enfants」「Mission Verte」「Precious Plastic Mauritius」「Action Familiale」「Zenes San Frontyer」「Youth with Disabilities Empowerment Platform」「Mahebourg Espoir」「Biodiversity Preservation」「Ti Rayons Soleil」「La Chaux Mahébourg Football Club」など10以上。一部の団体はワークショップを経て実りある協力関係を築き、サポートし合うことで、各プロジェクトにさらなる価値をもたらしました。

2022年、「基金」は有機農業やマングローブ保全といった他分野でも、同様のワークショップを複数回開催しました。



Click to navigate





主な取り組みと出来事



主な取り組みと出来事

ISME、マングローブ保全のためモーリシャスへ

MOLチャリタブルトラスト（「基金」）は8月16日（火）、バンブー・ヴィリュエのレストラン「La Case du Pêcheur」で、マングローブに関するワークショップを開催しました。国際マングローブ生態系協会（ISME）の日本代表と、「基金」の助成を受け、マングローブの保全に取り組む地元NGOが参加しました。

このイベントは、日本に拠点を置く「公益信託商船三井モーリシャス自然環境回復保全・国際協力基金」の支援のもと、「マングローブ生態系の保全・回復と持続可能な利用のための人材育成と科学的支援」プロジェクトにより実現しました。この会合の目的は、情報を共有すること、そしてISMEと地元NGOをつないで将来的なコラボの種をつくることでした。



日本からはISME理事長兼事務局長の馬場繁幸教授、日本マングローブ学会副会長の宮城豊彦教授、水文学やレーザー光を使ったリモートセンシング技術「LiDAR」の専門家である古川恵太氏・山本敦也氏が出席。地元NGOからは、「Fondation Ressources et Nature（FORENA）」「Ocean Connect」「Reef Conservation」「la Vallée de Ferney Conservation Trust」「the Association pour le Développement Durable」が参加しました。世界各地でマングローブを研究している宮城教授は、マングローブ生態系に関する最新研究の大枠を説明し、ラグーンの動植物と海岸線の保護に極めて重要な、この自然地域のユニークな特徴について詳しく紹介しました。



ポワン・ジェロームの海岸清掃

2022年6月8日、「基金」のメンバーはマエブールのポワン・ジェロームで行われた清掃活動に参加しました。このイベントは、「基金」が支援するNGOのうち、「Mission Verte」と「Precious Plastic」が、ホテルプレスキルと共同で開催したものです。

対象地域は海岸線の一部と、その奥にあるマングローブ林です。2時間で100kg以上のゴミを回収し、そのうち20kgは、アルミ缶とペットボトルを中心にリサイクルされました。



Click to navigate



議長挨拶 > インタビュー：マーク・ダレ氏 > インタビュー：ジミー・ハモン博士 > 教育・啓発プロジェクト最新情報 > **主な取り組みと出来事**



MMCO、研修プログラムを完了

MARINE MEGAFUNA CONSERVATION ORGANISATION (MMCO)は、南東地域に住む皆さんを対象とした研修プログラムを終えました。プログラムの内容は、ダイビングやイルカ&ホエールウォッチング、生物多様性研修などで、海の世界の素晴らしさと壊れやすさ、海を保護することの大切さを伝えることを目的としていました。8月19日にホテルプレスキルで行



われた修了式では、約60名の参加者に修了証が授与されました。

ボア・デ・ザムレットとアンス・ジョンシェでのマングローブ林清掃活動

7月26日の「マングローブ生態系保全のための国際デー」に合わせ、「基金」が支援するNGOの一つ、「Association pour le Développement Durable (ADD)」がモーリシャス南東部のボア・デ・ザムレットとアンス・ジョンシェで清掃活動を実施しました。

ADDの他に、「Bois des Amourettes VCA」「Grand-Port地区協議会」「Flacq Rotaract Club」「AnAngel」「New Invaders Club」「基金」といった団体や地元ボランティアも加わり、参加者は約100人にのぼりました。

駐モーリシャス日本国特命全権大使の川口周一郎氏をはじめとする8名の日本人も参加しました。清掃活動に加え、マングローブの生態系における重要性に関する一般向けの啓発活動も行われました。この日、100枚以上のゴミ袋が、プラスチックを中心としたさまざまな種類のゴミでいっぱいになりました。



「Caritas Mauritius」プロジェクトの第1期が終了

6月中旬、マエプールのChurch Notre-Dame-des-Anges (ノートルダム・デ・ザンジュ教会)で「Caritas Mauritius」のプロジェクト第1期の振り返りセッションが行われ、「基金」のメンバーも参加しました。このプロジェクトは、マエプール、ビュー・グランド・ポート、トル・ドー・デュース、ヴュー・ベル・エールといった

地域を対象としており、恵まれない立場の人々が雇用されやすくすることを主な目的としています。

目的は、参加者に自信を持たせること、良いコミュニケーション習慣を身につけること（話す前に理解する、より良いコミュニケーション、課題解決など）、そして日常生活に役立つことを教えること（計画的な家計、仕事への責任など）です。振り返りセッションでは、プロジェクト参加者からのスピーチもあり、その心のこもった言葉に、出席者は感動に包まれました。



Click to navigate



「MOL VANSOUET (エムオーエル・ヴァンスー号)」進水式

10月15日(土)、NGO団体「Mouvement Bien-Être Cité La Chaux (MBECC)」の漁船「MOL VANSOUET」の進水式がシテ・ラ・ショーのソーシャルセンターにて行われました。在モーリシャス日本国大使館、MBECCの代表者、「基金」の代表者、プロジェクト受益者らが出席しました。

この漁船を使えば、地元の漁師たちはさらに沖合に出て、収入を増やすことが可能になります。「MOL VANSOUET」の進水式では、日本酒で船を清める船祓いをはじめとする日本の伝統的な儀礼と、地元の漁師がシャンパンで新しい「仕事道具」を洗礼する命名式が併せて行われました。



「La Chaux Mahébourg Football Club」によるサッカー用具を寄贈式典

10月15日(土)、シテ・ラ・ショーのソーシャルセンターにて、「La Chaux Mahébourg Football Club」の若いサッカー選手たちにユニフォームやソックス、シューズ、ボール、ゴール、ハードルといったサッカー用具が寄贈されました。

同クラブの取り組みは、シテ・ラ・ショーの若者たちが健康的に身体を動かし、夢中になれるものを見つけることで、薬物やアルコールといった危険からも守ることにつながります。スポーツ指導だけでなく、若者が生活規範を身につけて将来に生かすためのトレーニングも定期的に行っています。現在、6歳から15歳まで62人の子どもたちが所属しています。



Click to navigate



議長挨拶 > インタビュー：マーク・ダレ氏 > インタビュー：ジミー・ハモン博士 > 教育・啓発プロジェクト最新情報 > 主な取り組みと出来事



